

第3回検討会の委員の皆さんの発言

1. さとの湯の基本計画について

- ① さとの湯の運営に関する過去の収支問題や、現行の運営状況の報告が行われた。特に、施設の維持管理や条例の見直しが必要であるとされ、運営効率を高めるための具体的な検討事項が挙げられた。
- ② 基本計画の進め方については、施設の現状と将来の運営方針に基づき、施設規模やサービス内容の検討が必要。特に、観光客のニーズに応じた施設の改良が重要。
- ③ 施設の経営を持続可能にするためには、運営母体の強化や、過疎地域の資金調達に適用できる「過疎債」の活用を検討が必要。さらに、施設利用者の視点を取り入れることで、地元住民と観光客双方にとって魅力的な施設づくりが重要である。
- ④ 施設計画書の章立ての提案があり、特に建築と経営の両面から、施設の持続的な運営を支えるためのガイドラインを整備する必要性がある。

2. サウナの設置と運営

- ① サウナの設置について、利用者のニーズに合わせた別料金制を導入するかどうかを議論。サウナ利用時の回転率が懸念され、効率的な運営を実現するための対策が必要である。
- ② サウナの設置が地域にとって新たな魅力を生み出す可能性があり、温泉とサウナを分離して提供する案が出された。これにより、より多様な利用者層を取り込むことができる。
- ③ サウナの効果や利用形態については、美容やリラクゼーションを重視する女性客のニーズに応える形での設計を検討。また、温泉とサウナの利用を通じて、地域のリピーターを増やすことも期待できる。

3. 施設のデザインと機能

- ① 施設のユニバーサルデザインを重視し、すべての利用者が快適に過ごせる空間作りが求められた。特に、館内の展示や案内板の見やすさ、エントランスの設計について提案があった。
- ② 駅前空間との連携や、JRと協力して観光客の動線を考慮した施設設計の可能性について提案があった。これにより、観光客がスムーズに温泉街へアクセスできる仕組みが強化されることが期待される。
- ③ 他の観光地の事例を参考に、待合スペースと展示エリアを融合させた空間を提案し、温泉の利用者がリラックスしながら地元の歴史や文化に触れられる場の提供が必要という意見があった。
- ④ 駅前でのイベントスペースの活用や、地元の祭りを体験できる展示が提案され、観光客に対して地域文化の魅力を発信することが重要視された。

4. 文芸館と麦わら細工伝承館の機能

- ① 文芸展示機能について、地元の歴史や文化をテーマにした展示内容の充実化が提案

された。これにより、観光客だけでなく地元住民にも親しみを持たれる施設を目指す。

- ② 温泉と文芸展示の融合を図り、温泉に訪れる観光客が地元の文化を深く理解できる仕掛けが求められた。特に、文芸作品を温泉と関連付けた展示が観光の付加価値を高めるのではないかとという提案があった。
- ③ 若者や大学生の視点を取り入れ、アニメや SNS を活用したコンテンツを提供することで、次世代に対する訴求力を高めることが考えられた。体験型コンテンツを取り入れることで、施設の魅力をさらに広げる提案がなされた。

5. 温泉運営と収支の問題

- ① さとの湯の過去の運営実績や、赤字が続いていた時期の原因分析が行われた。特に、施設の収支を改善するためには、利用者数の増加とともにコスト削減も必要であるとされた。
- ② 温泉供給のルールや料金体系について見直しの必要性が議論され、特に日帰り利用者に対する料金設定の改善が課題として挙げられた。
- ③ 契約入浴料制度を見直し、施設運営における柔軟性を持たせることで、財産区の持続可能な運営体制を整えることが検討された。これにより、地元住民にとっても利用しやすい施設となることが期待されている。

6. 過疎債と資金調達

- ① 過疎地域に適用される「過疎債」を活用して資金調達を行う可能性について話し合われた。特に、施設のリニューアルや改築に向けた資金を確保する手段として期待されている。
- ② 過疎地域での事業適正性を保ちながら、財源確保のための具体的な手法についても説明があり、地域にとって負担の少ない形での資金調達が模索された。
- ③ 過疎債を活用することで、新しい施設計画を進める際に地域経済への負担を最小限に抑えながら、持続可能な運営が可能になると考えられた。

7. 環境・エネルギーの活用

- ① 温泉熱を活用したエネルギー効率の向上についての提案がなされ、自然エネルギーを活用することで地域の持続可能性を高めることが議論された。
- ② 温泉の熱エネルギーを循環させる仕組みや、施設内での効率的なエネルギー利用について具体的な意見が交換された。これにより、環境に配慮した温泉運営が実現されることを目指している。
- ③ 地元の大学生から、温泉熱を植物栽培に利用するアイデアが提案され、観光と農業の新たな連携が模索されるなど、地域の多様な資源活用が検討された。

8. 施設の将来像と地域貢献

- ① 100 年先を見据えた施設計画の重要性が強調され、長期的な視点での施設の維持管理とまちづくりの連携が議論された。これにより、次世代にも受け継がれる施設を目指している。

- ② 地域貢献の視点から、観光客だけでなく地元住民にとっても有益な施設となることが目標に掲げられ、地域社会と観光産業の調和を図るためのアプローチが議論された。
- ③ 新しい施設ルールを導入し、観光客と地元住民が共存できる空間づくりが提案された。これにより、地域の魅力をさらに高め、持続可能な観光地としての地位を確立することが目指されている。